



「芝は刈れば刈るほど丈夫に、刈り芝は捨てない」前花グリーンキーパーが実践する管理法

その 237

クローズアップ21

## 嵐山カントリークラブ 会員が予約なしでプレーできる

### そして絶対の自信を持つコース管理

嵐山CC（18H、埼玉県比企郡嵐山町）は、関越自動車道・東松山ICから約10分等の良好な交通アクセスで、しかも理想のクラブ運営と、コース管理への自信を前面に打ち出しているクラブだ。

その姿勢はホームページ頭にある岸信介初代会長の「理想のゴルフクラブを作ろうと集まったゴルフ好きの仲間が作ったメンバーシップコースです」の言葉に集約されており、また会員募集案内でも「コースコンディションに絶対的な自信」を表明している。

今年には新型コロナウイルスの影響でゴルフ場の経営も響いているが、同CCは一連の改革から財政的にも安定してきたという。

今回はゴルフ団体でも社長やグリーンキーパーなどが要職に就く嵐山CCを訪ねた。

#### 嵐山CCの歴史は20人のゴルフ愛好家でスタート

嵐山CCは昭和37年、西暦では1962年にオープン。かつて東京に東雲GC（1952年開場、江東区の今の有明テニスの森あたり、1981年閉場、井上誠一氏設計）があったが、閉鎖の危機（都

からの借地10年契約だった）から「自分達のクラブを作ろう」と20人で会社を作ったのが始まり。それら歴史は業界では知られているところで省略するが、ゴルフ愛好家の思いを引き継ぎ、「アマチュアゴルファーの聖地」がクラブモットーとなった。

初代理事長の天野健雄氏中心の20人の中で、最も若いメンバーに吉田裕明社長の父の吉田友明氏がいた。東雲で交流のあった岸信介氏に会長を委任した当時、岸氏は総理大臣を務めていた頃という。

小寺西二氏が設計したコースは1984年の日本オープン開催など定評があったが、転機が訪れる。先代の吉田友明社長は2003年から8年までKGA理事長を務め奔走する後年のことだった。

吉田社長は「私が引き受ける前、ご多分に漏れず、赤字続き。ちょうど、世の中の変わり目でした。親父もだいたい年を取ってきて一番若かったのが最後に残ってやってきましたけど、見ていると気の毒でした。私は他の仕事をしていましたが、会社の役員会に入っていましたので手伝わなきゃいけないなと思って、約10年前にじゃ



吉田裕明(株)嵐山カントリー倶楽部代表取締役社長  
中心に左が一戸俊太郎取締役支配人、右が前花貢  
取締役コース管理部長兼グリーンキーパー

手伝うからと引き受けました。その最初の仕事で、ご存じだと思いますが年会費の値上げでした。当時としては先鞭をつけた形になりました。

2010年に年会費を7・35万円から15万円に値上げ。そして、翌年「3・11、東日本大震災」が起ころ。

「年会費値上げで勉強させていたでいて、そのあと東日本大震災が起きました。お客が激減する大変な時期だったので、世の中が変わったのにこれまでのやり方ではゴルフ場が続いていけないだろうという中で中期計画を作って、その中で増資をした時期です」

11年に増資(計5292万円、内半分を資本金、残りを資本準備金に組み入れ)全額を吉田社長を含む株主が拠出した。

「前任の社長が一番大事なのはゴルフコースなんだと。そこで腕のいいキーパーをということで前花キーパーに来ていただいた経緯がありました。すごく難しかったのは、メンバーさんに良かれとすると、クラブを存続するのが大変なことです。今もそうかもしれませんね」

基本は会員に相応の年会費負担をお願いするが、「メンバーが予約なしにプレーできなくなるのは恥だよ」という思いで、難局を乗り越えられたのも「コースだけはちゃんとしていた」お陰という。

年会費については「名門コースでは運営面での赤字を名変料で補っていたのでしようが当クラブでは怪しくなっていたので」という。

会員数は高齢化により年々減少していた。このため8年ほど前から一代限りの会員を少しずつ募集(300万円)、生前贈与を名変料半額の100万円ですべて受けてきた。これにより最大で約1600名在籍していた会員は900名

弱に減少したが、償還が必要な預託金額も減少した。「10年ほど前は70代、80代の理事も多くいらしたが、今は60代中心に50代、40代も」と若返りし、「ゴルフを好きな若い方の入会が増えた」としている。

この結果、今や財政的にも「トントンくらいには」と安定し、今年のコ罗纳禍でも「他所ではプレーできないから」とメンバーが足しげく同コースに通い、対予算比ではマイナスだが赤字にはならぬ見込みだという。

吉田社長は「私は業界に詳しくないですから、おそろおそろ試してきた感じです。会員や従業員にはご苦労やご負担をお掛けしました」と話している。

練習場の一面にはレッドベターアカデミーのブースがあり、インストラクターが同CCCの研修生だった縁で昨年度に開校した。3名のインストラクターが在籍、競技の前にレッスンを受けるメンバーも増えているという。

一戸俊太郎支配人は「かなり遠方から通われている生徒さんもおられます」と話す。ちなみに同CCCの年間来場者数2万数千人のうちメンバー来場比率が50%で、

残りの8割型がメンバー同伴のゲスト、その他がビジターという。ビジターは「平日に外部主催のイベントなどで利用してもらいます。が皆さん競技志向の方ですぐ定員に達します」とし、コース状態には感心されるという。プロでもある一戸支配人から見ると同CCCは「程よい高低差(コース内27メートル)や傾斜があるのが難しいのでしようね」と話し、過去のプロやアマの競技でもスコアメイクに苦戦する選手が多かったという。

### キーパーは米ぬか、海水等も活用。中休みは2時間で体調管理

前花貢グリーンキーパーは、取締役コース管理部長を兼任しており、13年程前に同CCCに赴任した時、「予算が随分使える。それと芝が良く伸びるなあ」と思ったという。「はじめの3・4年でこれは肥料をたくさん撒いてるため」と気づいた。芝草学会の他に肥料学会、微生物学会にも出席し、これら仕組みが腑に落ちたという。そこで「バケツト(集草箱)を付けずに刈りっぱなしにし、刈草を堆肥として活用する」サステイナ

バケットを付けず刈る



カラー部分は刈り芝を細かくして肥料を抑える



管理も考えティを新増設



外国人シェイパーのアドバイスでティ新設



ブルな管理を行ってきている。

また米ぬかをグリーンなどに年に3回、もしくは4回入れる。保水力が高まり焼けにくく、病気になるにくい。

海水も撒いている。「ナトリウムや塩を毛嫌いするんですけど、濃度が高すぎるだけで植物、人間も元々の発祥は海からということ、そういうのを薄くしてミネラルを供給してやるというのはお金がかからない。どの濃度でどの量をどの時期にやればいいのかはナーセリで試験しながら行っています。この2年ほどは、もみ殻を試しています」と話している。

吉田社長は「キーパーには人員

確保の計画面を含めて十分な成果を上げてもらっています。予算があればもっと良く管理できるんですけど」と全幅の信頼を置く。

前花キーパーが赴任したころの管理要員は16名で、現在は10名に減ったが、減った分の人件費の半分の給料上乗せが実現した。

関東7倶楽部などの名門が歩きのプレーにこだわっている中、同クラブでは4年前にナビ付き乗用カートを導入し、セルフプレーの受け入れやキャディ運転時のフェアウェイ乗り入れも実現した。

と同時にキーパーはティの増設も手掛け、レディステイや前方ティを新設した。一方で乗用モアに

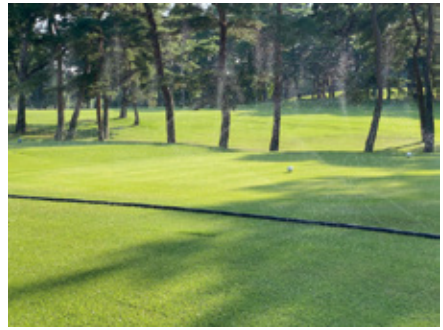
乗ったまま芝刈りができるよう、バックティからフロントティまでつなげた広大なティーイングエリアも出現させた。

肝心のグリーン刈りは早朝にアルバイトに任せているという。周囲には意外に思われたらしいが、短時間で指示通りに刈ってもらえるので十分だとしている。

乗用カートの導入とコロナ禍でセルフが増えたことにより、一戸支配人によると13名のハウスクヤディと人材派遣4社のやり繰りで、キャディ不足は解消されつつあるようで、吉田社長は「今後、心配なのはコース課要員の確保です」と話している。

前花キーパーは、同CCに入った際に「定休日の月曜日にコース課も休んでいた」のも驚いたそうで、1日の労働時間を減らして総労働時間を同じにしたという。そしてコ

ース課の勤務時間は7時〜17時を30分前倒しして6時半〜16時半とし、中休みを1時間から2時間に拡大した。プレーヤーがいる時間帯は作業が中断するので、実際は5時間くらいしか作業していない。休憩にして、作業効率を高めた。ただし、いきなり変化させると反発も予想されるので、中休みを最初1時間半にし、2、3カ月様子を見てから2時間と段階を踏んだ。今や、早い時間は車が混まないし、帰社後には役所にも行けると評判がいいという。10年程前に新設した管理棟はクローラーや畳があつて、中休みの間は1時間ほど昼寝をしている人も多く、夏バテせずに働



ティも農業用ホースを活用して散水

くなど勤労意欲も高まったとしている。

前花キーパーは、「キーパーの腕を上げる目安は水やり」と話している。同CCはグリーンやフェアウェイもスプリンクラーが完備されているが完璧ではない。そのため足りないところには手散水をするが、若きコース課の人達も考えて撒くようになったという。これも作業効率化の効用であるようだ。

同CCは2月の他にも8月の第1週に1週間の休場日を設けている。医者である吉田社長の全面的な理解、後押しも大きいそうだ。

前花キーパーは「他のキーパーとの情報交換も非常に役立つという」と話しており、今後貴重な

管理手法の発信に期待したい。

また会報「RAN ZAN」で前花キーパーに取材した話が取り上げられており、今年春号ではこの10年で「林の中にも芝が生えている」謎を取り上げ、「芝は刈れば刈るほど丈夫に生きようとする。日

々刈ることによってランナーが張って広がった」ことや、夏号では刈った芝をブロワーで吹いて、芝の根に絡ませるように差し込ませることで堆肥化し、芝の腐葉土で育つ自然への回帰の減農薬・肥料の管理方法を説明した。林帯でも芝生が育ったのは松の間伐、剪定により光が差し込むようにした効用であることも付け加えた。

### クラブハウスは改修重ねる

吉田社長の話に戻ると、クラブハウスは初代理事長の親族である天野太郎氏の設計で、現在は躯体は開場当時のまま。震災後に耐震構造を調べて、ここ7年ほどで徐々に改修を重ねてきたという。



クラブハウスは初代理事長の親族、戦後のモダニズム建築の旗手として活躍した天野太郎氏の設計。DOCOMOMOに選定された日本唯一のクラブハウス

「現ハウスは1日の来場者の想定が90人位で、今がちょうどその位。開場当時に戻っている気がします。まだ直したいところもありますが、それは次の人達がやればいいのか」と吉田社長は話す。

コロナ禍により、来場者は減ったが、メンバーの来場が多く、今年には赤字にならない見込み。乗用カートの導入も功を奏した格好で、メンバー限定だが午後からのハイプレーなど自由度を高めている。

8月13日に「新型コロナウイルス感染拡大防止対策」の方針を改定し、浴場でのシャワー利用開始を案内（男子8名、女子6名に利用制限）、スループレーが基本で閉場は16時等と案内している。

吉田社長は、自民党ゴルフ振興議員連盟の事務局長を務める岸信夫理事長とは同級生で、小さい頃から同CCに来て遊んだ仲と心強い。医師としても客員教授や2年前に再生医療ベンチャーの会社を設立したようでも多忙に違いない。

クラブ広報委員会が編集発行する最新号の会報では、「嵐山の未来」に率直な質問を投げかけた。

吉田社長は「ゴルフこそが私たちにとつての（人生を飾るための）バラなのだ」という気づき、もう1つは「主人公はメンバー」というもう1つの答え、そして「アマチュアゴルファーにとつての聖地」を実現することが「嵐山イズム」の具現化につながると答えている。